

逆境をバネに!

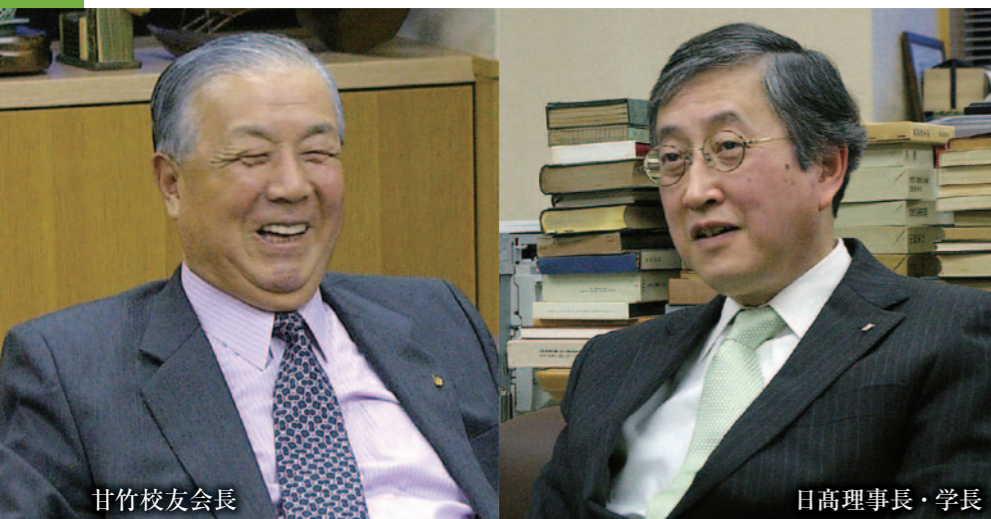
日高義博

学校法人専修大学理事長
専修大学長
法学博士

甘竹秀雄

専修大学校友会会長
株式会社アマタケ 相談役

専修大学は建学以来130年余の歴史において、関東大震災や第二次世界大戦という大きな災禍に見舞われ、その度に逆境をバネに成長してきた。今回の「東日本大震災」でも大きな打撃を受けたが、先輩方の経験と伝統を踏まえて、この困難を乗り越え、次世代につないでいきたいと考えている。今回の対談では日高理事長・学長、甘竹校友会会長のお二方に、2011年を振り返りつつ、「創立150年」に向けて専修大学および校友会の未来と展望について、語り合っていた。本学の先輩、人生の先輩として、お二方の人生観や逆境をバネにしていく生き方は、読者にも大いに参考になるはずだ。司会■「アドニス」編集部



甘竹校友会会長

日高理事長・学長

編集部 ■ まず、2011年を振り返るとともに、**新年のごあいさつ**をお願いいたします。

日高理事長・学長 ● 新しい年が明けました。昨年は生き方まで改めて考えなければならぬ大変な年でしたが、今年は本学の「創立150年」に向かって大きく前進する年にしたいと思います。
甘竹校友会会長 ● 明けまして、おめでとうございます。昨年は「東日本大震災」、秋には愛知・三重を中心とした水害等々で、全国の校友の皆さんも被害を受けたと思います。今年はそれらを乗

り越えて、校友会としても昨年できなかったことを含め、大学発展のために頑張っていきたいと考えています。

編集部 ■ 次に、「東日本大震災」が本学に及ぼした影響を、お話しいただけますか。

日高理事長・学長 ● あの大地震が起きて一番心配したのは、激震地の宮城県・石巻市にある石巻専修大学です。幸い建設時に頑強に造ってあったため、校舎は無傷に近い状態で残りました。ただ、学生が7名亡くなったこと、そし

てご家族が亡くなられた教職員も、かなりいます。東北圏域には卒業生がたくさんおり、その被害も甚大で、現に甘竹会長も大変な状況だったとお聞きしています。

専修大学については、生田校舎の3号館は傷みがひどく、昨年秋に解体しました。2号館は教室として使用禁止となり、神田校舎も5号館が同じく使用禁止となりました。物的損害では、石巻専修大学より専修大学のほうが、比較にならないほど大きかったですね。

被災した学生の支援のために、学費減免の制度を設けました。石巻専修大学は学部・大学院の約1800人中、1/3の学生が対象となり、専修大学では約460名が対象になりました。入試に関しては、被災者支援スカラシップを設け、向こう3年間、実施する予定です。奨学生の授業料減免、建物の物的損害などを含めると、20億円強が必要となります。

校友会、育友会から多額の寄付をいただき、また卒業生や育友会の方からもたくさんの寄付が寄せられています。本当にありがたいと思います。本学は日頃から非常に「絆」が強いのですが、地震が起きたことで、より強く



被災、損壊した生田3号館の2F中階段。建物は昨秋、取り壊された

被災した学生の支援、建物の物的損害などを含めると、20億円強が必要です。

——日高義博 学校法人専修大学理事長・専修大学長

なつたと感じています。

編集部 ■ 甘竹会長は、ご自身や会社も被災されて大変でしたが。

甘竹校友会会長 ● 震災後に発送した『アドニス』『ニュース専修』の返送状況から、150名前後が被害を被ったのではないかと。また、残念ですが、校友が6~7名ほど亡くなったらしいとの情報を校友会では得ています。

校友会活動も、昨年の4月から8月くらいまで、定時総会をはじめ、ほとんどストップしました。しかし、後半10月から11月にかけて、全国各地で支部活動が活発になって戻りつつあります。今年はそういう「絆」を、もっともっと大切に、また専修大130数年の伝統を生かして、なんとかこの逆境をバネにしたいと思っています。

編集部 ■ いまこそ、伝統の力、130年余の力、あるいは人という財産、資産を生かすべきですね。

日高理事長・学長 ● 新しい仕掛けをしなくても人が、組織が動く、というのが伝統の強みです。これは凄い。

編集部 ■ 会長ご自身も、全国からお見舞い、支援をいただいたそうですね。

甘竹校友会会長 ● はい。激励と支援物資と義援金を、校友会の皆様からいただき、本当にお世話になりました。特に必要だったのは、津波を被った工場などを

清掃するブラシでした。支援してくださった皆さんも、これは意外だったみたいです。

日高理事長・学長 ● 現場にいないと、なかなか分からないですよ。

甘竹校友会会長 ● 国会議員の先生にも、支援物資をいただきました。たとえば、カップラーメンを食べたいという要望

震災後は、会社の売上ゼロ。本当に苦しくて、最初は真っ暗でした。

——甘竹秀雄 専修大学校友会会長

を伝えると、数千食いただきました。

日高理事長・学長 ● 1995年の「阪神・淡路大震災」のときも、卒業生が人的ネットワークを駆使して、救援物資を運びました。

編集部 ■ 今回の対談のテーマ「逆境をバネに！」について、ご自身の体験をお話しいただければ。

甘竹校友会会長 ● 私は、養鶏の仕事をしていますので法定伝染病と食中毒、この2つは絶対に出しては駄目です。社内には、徹底的な危機管理をさせてきました。

ただ、会社が地震や津波の被害を受けるとは、まったく考えませんでした。今回の震災まで、考え方が甘かった。

経営者ですから、景気がいいときの上り坂も、ちょっと低迷の下り坂も経験しました。よく先輩から「『まさか』という坂があるから、気をつけておけ!」と言われ、危機管理や病気に関しては、ずっと徹底してやってきました。

ところが、今回の地震、津波は想像を絶するもので、最初はボーッとして何から手をつけていいか分かりませんでした。1週間、10日くらい経ってから、「こんなことで、へこたれては駄目だ!」と思い直しました。



(左)津波に襲われたアマタケ本社(岩手県大船渡市)ビル3Fから。右は食堂内。写真提供=株式会社アマタケ

とは言っても、社員は約500名いて、4カ月間売上ゼロ。お金が入ってきませんので、機械や設備の整備もできません。正直、立ち直れるのかなと思いましたが、先ほどの校友や育友との「絆」のように、社員との間にも「絆」があり、2カ月くらいで回復してきました。逆境になっても、経営トップはアドバルーンを上げて引っ張っていかなければ駄目だと、痛切に感じました。
編集部 ■ トップに元気がなくなると、社員も元気がなくなる!?

続きは、アドニス58号でお読みいただけます。